あとがき

一、この小稿は経済同友会十年の足取りを記したものであるが、同友会の思想と行動の背景あるいは基盤をなしていた客観的な経済状勢、政治状勢の推移展開についても、一つの関心を示した。

一、しかし何といつても主眼は同友会の過ぎて来た道を顧ることにあるのだから、客観状勢の記述は、その時における同友会の考え方なり動きなりを理解するのに広く役立つ限りにおいて、またその角度から行つた。従つてこの面での記述は、その時代により濃淡、精粗の差があることを諒とされたい。

一、同友会自体の歩みについては「経済同友会会報」および「経済同友」を、昭和二十九年春からのそれについては「経済同友会幹事会通報」をもあわせ参照した。特に同友会発足後一両年間における謄写版刷りの粗末なしかし内容充実した「会報」は、苦難の中から奮い立つた同友会の当時の雰囲気を、そのまま伝えているものとして印象深かつた。「会報」は日本経済の発展に応じその紙質、印刷、頁数において立派なものになつて来たのである。

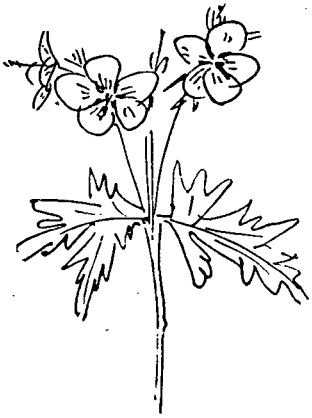
一、客観状勢の記述において参照した書目は次の通りである。

鈴木武雄著「現代日本財政史」上・中巻

J・B・コーヘン著　大内兵衛訳　「戦時戦後の日本経済」下巻
R・A・フィアリ著　日本太平洋問題調査会訳　「日本占領」
W・H・ボール著　中山立平・内山健吉訳　「日本、敵か味方か」
経済再建研究会編　「ポーレーからダレスへ」
通産大臣官房調査課編　「戦後経済十年史」
国民経済研究協会編　「戦後日本経済の諸問題」
日本経済政策学会編　「戦後十年の日本経済政策の変遷」
地銀協編銀行叢書、吉野俊彦述　「戦後の金融政策の推移と展望」
富士銀行編　「富士銀行七十年誌」
岩波・日本資本主義講座別巻　「戦後日本資本主義年表」
同　第七巻　大河内一男　大友福夫　「戦後労働運動史」
労働省編　「資料労働運動史」
日本銀行統計局編　「本邦経済統計」
日本銀行調査局編　「日本金融年表」
中央労働委員会編　「労委十年の歩みを語る」
復興金融金庫編　「復金融資の回顧」
帝国銀行調査部訳　「事業経営者の道、外二篇」
J・M・ドッジ著
毎日新聞社刊　「エコノミスト」

朝日新聞社刊　「朝日経済年史」
経済審議庁編　「年次経済報告」
東洋経済新報社編　「日本経済年報」
毎日新聞社刊　「毎日年鑑」

ここに掲げて謝意を表する次第である。

昭和三十一年十一月

（著者しるす）